

東日本大震災から1年 NPO底上げ活動報告書



NPO底上げ
斉藤祐輔

2011.03.11

東日本大震災後、現在に至るまで被災地や日本各地にて、震災支援活動が続ける。本書では、この期間における当団体、もしくは、当団団体設立以前から行っていた底上げメンバー個人での活動概況について報告し、その中で明らかになった課題とそれにむけた解決案を提示するものとする。

—NPO底上げができるまで—

震災直後から底上げJAPANと名乗り、任意団体として活動を開始する。



関東にて支援物資を集め、募金を募り、また東京で何か支援をしたいという人のボランティアのコーディネートも行った。

3月19日から被災地に入り、単発的に物資を配給したり泥かきなどのボランティアを行った。

4月17日、後にNPO底上げの理事になる矢部、齋藤は、仲間を連れて被災地宮城県気仙沼に入り、当時避難所になっていたホテルを拠点とし、長期的な支援を始める。

4月から同年11月までの8ヶ月間、任意団体“底上げJAPAN”として、支援物資の配給、避難所の運営管理、ホテルのお手伝い、ボランティアの誘致、ボランティア宿泊施設の運営、ボランティアコーディネート、復興ひまわりプロジェクト、寺子屋、被災地の現状を伝えるための講演会、等、自分たちが必要だと考えた多岐にわたる活動を行う。

活動内容については後述するが、こうして地域に密着して活動していたことにより、たくさんの繋がりを得ることができ、地元の方にも喜ばれた。

9月以降、被災地域外での震災の記憶の風化を強く危惧するようになる。さらに、復興がなかなか進まない被災地の現状を見ていく中で、より長期で活動を続けていくことを決意する。2011年11月、同年8月からテント暮らしをしながらボランティア活動をしてきた、成宮をメンバーに加え、本格的にNPO団体として活動を開始する。現在、法人格取得するための申請手続きを行っている。

—活動実績—

・支援物資の配給

3月19日より支援物資の配布を開始する。宮城県名取市、多賀城市、塩釜市、松島市、石巻市、南三陸町、気仙沼市へ支援物資配布。当初、避難所の情報も少なく、何があって何が必要なのか、情報を集めるのに大変苦労した。震災後一週間が経過したという時期で、食料はそろそろ回ってきている。次は衛生面だと思い下着類をはじめ多くの物資を避難所に届けた。案の定、一週間同じ下着



で過ごした被災者、風呂に入れぬ被災者がほとんどであったため大変喜ばれた。支援物資は、被災地に届けた後、また、内陸の山形に物資を購入しに行く。そのピストン作業を一週間ほどおこなった。当時はガソリンの入手が困難であったが、道中で軽トラックが緊急支援車両に認定され優先的にガソリンを入手できた。

4月からは長期的に気仙沼に入った。東京で集めてきた支援物資を軽トラックの荷台に積み込み、まだ行政の手の届いていなかった小さな避難所や内陸の場所へ物資を届けた。

当時はまだ混乱が残っており、我先に物資をつかんで持ち帰る人たちの姿が強く印象に残っている。

・避難所の運営管理、ホテルのお手伝い

拠点としていたホテルは震災直後避難所となっており、最大250人前後の避難者を受

け入れていた。避難者の多くは瓦礫や津波で流れ出た重油の中を通過して避難してきたため、ホテルの中はひどく汚れていた。地震により配管は裂け、壁には亀裂が入り、建物そのものの被害も多く見受けられた。しかし、2011年4月、復興のために工事関係者を宿泊客として受け入れてほしいと、市からホテルに連絡が入る。気仙沼市街にある宿泊施設の多くは被災しており、形をとどめているホテルは貴重だった。

まだ、当時は水道電気ガスのライフラインも来ておらず、もともと雇用されていた従業員は失業保険をもらえるようにするため全員解雇していた。また震災後避難所だったこともあって、避難所解除になってからも支援物資供給所として、近隣に住む方の分、約70世帯分の食料などの支援物資が市から毎日届いていた。そんな中、旅館業が再開する。

従業員はホテルの社長と女将だけ。ボランティアとしてきた私たちは、部屋のメイキング、トイレ掃除、館内の壊れた個所の点検、宿泊者管理、受付業務など、できることはなんでもやった。

宿泊客が帰ってきたら、足元を懐中電灯で照らしながら部屋まで案内し、水道もまだ通っていなかったため、毎朝配給される2tの水をペットボトルとバケツに入れて部屋とトイレに持っていった。

そういった旅館業と並行して、市から配給される物資の仕分け、配布といった作業も行う。ホテルの社長と女将は自宅が流され、息子とおばあちゃん4人でホテルのはなれの部屋で寝泊まりをしていた。私たちもその一室をお借りして暮らしていく中で、彼らとは家族のような絆で結ばれていった。

・ボランティア活動

泥かきやがれき撤去、思い出の品探しなど、石巻から釜石まで多地方に渡って多くのボランティア活動を行った。特に気仙沼市では長期ボランティアということで、市社協運営のボランティアセンターのスタッフとして協力することの依頼を受け、スタッフとしてボランティア活動を続けた。

また地元の方に直接依頼を受け、ボランティアセンターを介さず活動することも多々あった。



そして1年が経とうとしている今、被災地のニーズというものも大きく変わってきている。

その中で、被災地に来て五感で多くのことを感じ、地元の人との交流をして、ご飯やお土産を仮設商店街で買う。そういった新しい形のボランティアを提案し、バスツアーも企画した。



・ボランティア宿泊施設・ボランティアコーディネーター

5月になり、ホテルの電話を取っている中で、「ボランティアに行きたいんだけど泊まれる場所はないか？」といった問い合わせが多くあった。

当時被災地では、ボランティアに来る人のほとんどがテント泊か車中泊であった。復興支援業者で宿泊施設が満館の中、ボランティアに来た人が雨風の凌げる部屋の中布団で休むというのはかなり難しい状況だった。ゴールデンウィークも終わりボランティアの数が減少傾向にある中で、少しでも外から来るボランティアのニーズに応えられないかと考え、拠点としていたホテルに掛け合い、震災前は宴会場だった大広間を借りることができた。そこで雑魚寝相部屋スタイルでボランティア宿泊施設の運営を始める。

5月から現在まで、延べ1800人前後のボランティアを受け入れた。きてくれたボランティアのなかには社会福祉協議会が運営するボランティアセンターを介さず活動できるか？という要望もあったので、私たちと地元の方たちとのつながりの中で、人手がほしいというニーズがあったところにボランティアを派遣したりもした。

・復興ひまわりプロジェクト

被災地で活動をしていく中で、ひまわりの種が届いた。その種は阪神淡路大震災のときから植えられ、その種が新潟県中越地震の際に現地にもたたりまた植えられ、そして今回、震災復興のDNAを持つ種が東日本大震災にもやってきた。それが私たちの手元に届いたので復興ひまわりと名付け、地元の方と一緒に育てた。夏にはきれいな花を咲かせ、多くの人がひまわりの前で立ち止り、感嘆の声を上げていた。このひまわりは気仙沼市役所の前にも置かせていただけ、たくさんの人の心を和ませた。





・寺子屋

学校が夏休みに入ると、子どもたちの遊ぶ場所や勉強する環境がないことが問題となった。仮設住宅は決して広くなく、勉強机も置けない。外に出ても、被災していない公園や学校の校庭はほとんど仮設住宅で埋め尽くされていた。そんな中で、私たちは近くの民宿に協力してもらい寺子屋を開いた。近隣の小中学生を集め、勉強半分、遊び半分の内容で始めた。なかなかストレスを発散できる場所がなかった子どもたちはとても喜んだ。

・講演会

9月に入り、被災地域と被災地域外で震災に対する意識の差を大きく感じるようになった。関東近郊では震災に関するニュースはほとんど原子力発電所の話題に占められ、その他の被災地に関するニュースはポジティブなものが多く流れるようになっていた。それ自体が悪い



こととは全く思わないが、毎日被災地を目の前にして活動している私たちは、復興がまだまだ遠いことを肌で実感しており、被災地域外で震災の記憶が風化していくことに対して大きな不安を持っていた。また被災者の方々と話している中で、被災地のことを忘れないでほしい、という意見を多々耳にした。

長く被災地に入り活動していた私たちにとって、被災地の現状を伝えること、被災者の声を伝えることは重要な活動であると考え、全国各地で講演活動を始め。小中高大学校、イベント、企業、など様々なフィールドで講演する機会を頂き、多くの方に被災地の状況を発信することができた。

講演を聞いた後、話に共感してくれた学生たちが実際気仙沼に訪れ、ボランティアをしたり私たちの活動を支援してくれたりということも多くあった。

・教育支援

震災後学校の始業式は一か月遅れ、勉強もなかなか落ち着いてできない環境だった。また仮設住宅に住む被災者は、子どもも親も多くのストレスを抱え生活していた。

そんな中で、教育支援をいくつかの方法で始めた。

一つは仮設住宅の集会所を用いて学習を促すものである。これには子どもたちの学習支援やストレス軽減以外にも狙いがあった。仮設住宅にはいろいろな地域から来た人が暮らしている。したがって既存の地域コミュニティが存在しないところが多い。仮設住宅に隣接する集会所に子どもたちを集めることで、周囲の大人も集まり、仮設住宅内のコミュニティを再生する狙いもある。

実際に、正月に書初めをやった際には仮設住宅に住む方が習字の先生として参加してくださり、子どもたちと触れ合ったりという機会も多くあった。



二つ目は地元のコミュニティスペースで学習の支援をする方法である。こちらはより勉強に重きを置いた。震災から一年間、遅れ気味になってしまっている学習面のサポートをできる範囲でバックアップした。小学生から高校生まで集まり、ボランティアと現地の若者との交流の場にもなっている。

三つ目は教育委員会から委託された業務で、実際地元の学校に出向き、放課後の時間を使って自習の見守りをするものだ。気仙沼市の多くの中学校で行われており、行政がプログラムし地域で実施されている。2012年2月から始まり、まずは受験までの一か月間、中学三年生を中心に教室を開放し、自習支援員という形で生徒がわからないところ教えている。被災地気仙沼市で長く活動しているということで、気仙沼市教育委員会から依頼を受けた。

・加藤登紀子交流ミニライブ

2012年2月11日、アーティストの加藤登紀子さんを招いて、交流ミニライブを開催した。拠点としているホテルのバンケットホールを使わせていただき、当日は被災者250名を無料招待してコンサートを行った。400名以上の応募があった中、抽選で選ばれた参加者は、たくさん泣き、たくさん笑って、帰って行った。「震災後生きてきてよかったと初めて思えた」とまで言ってくれたおばあちゃんもいて、震災から絶望の中暮らしていた方々にも希望を与えることができたと思う。しかしその反面、まだまだ被災者の心は痛んだままだったということ強く実感した。震災後、どこか、わーっと泣けないような、

思い切り笑えないような雰囲気があった。今回この交流ミニライブを企画した一番の狙いはそこにあって、みんな大声で泣き笑いできる場所をしっかりと提供することができた。

またそれに合わせて、ボランティアバスツアーも企画した。40名を超えるボランティアスタッフが参加し、前日から被災地に入った。当日はコンサートの運営スタッフとして動いてもらい、受付、会場整備、車誘導、会場内の照明に至るまで、仕事を割り振り、コンサートを創り上げた。空いた時間を用い被災地の現状を知ってもらうため、バスで被災地を案内した。



翌日は地元の中학생と学校のグラウンドを使用し、サッカー交流の場を作った。

地元の方にもボランティアにきてくれた参加者にもみんなに喜ばれ、今回の加藤登紀子交流ミニライブは成功をおさめた。今後もこういった活動の必要性を感じた。



・ともしびプロジェクト

2011年11月より、気仙沼で竹灯籠を作り毎月11日に火をともしている。

これは、亡くなられた方の魂の鎮魂と震災の記憶を風化させないために行っているもので、被災地域に限らず、口コミやfacebookを活用して多くの場所で明かりをともしてもらっている。その場合はもちろん竹灯籠じゃなくてもよい。キャンドルなどの明かりをともしているその間に、少しでも被災地のことや震災のことを考えてもらいたい。そういう想いを込めて毎月周りに呼びかけながら活動を続けている。

気仙沼では、毎月11日の準備として地元の高校生たちとボランティアとで竹灯籠づくりも行っている。地域に密着して行われているからこそ支援に意味がある。直接的には復興に関係ないように見えるが、この活動こそ実は被災者とボランティアをつなぐ復興支援のあるべき形なのかもしれない。



—今後の課題と活動について—

2011年3月から支援活動を始め、被災地の需要が刻一刻と変化する中でそれにあわせて支援の形も変えてきた。

震災から一年が経った今、被災地も大きな変革の時を迎えていると私たちは考えている。今まではモノやサービスを支援という形で単発的に受け入れていた。しかしそれでは復興には繋がらない。今必要とされているのは、被災者の心のケア、そして被災者自身が自立するための支援である。以前のように無償でモノやサービスを受け入れるというのは、被災地にあった既存の産業を圧迫することにもつながる。したがって今後はより被災地に寄り添った形で、地元の方とともに何かを興すというのが最良の支援の在り方であると考えている。私たちが現地にいながら地元の方々と企画をし、被災地域外からボランティアとして人を誘致する。外から人を呼ぶことにより、被災地の商店がもう一度活気を取り戻すための自立支援にもつなげようと思う。

今まで積み重ねてきた経験や知識を最大限に活用し、今後も被災地復興に寄与できる活動を続けていきたい。



気仙沼市鹿折小学校の生徒が書いた七夕

一億二千万人の三歩で日本を底上げ！